

政治参加につながる内的有効性感覚を高める シチズンシップ教育

—地域の行政機関等に社会課題の解決策を提案する活動を取り入れた課題解決型学習を通して—

野澤 大地¹

選挙権年齢・成人年齢が18歳に引き下げられて以降、若者の政治参加が強く求められている。しかし、我が国では「自分の行動で国や社会を変えられる」と感じる若年層の割合が諸外国に比べて低い。本研究では、生徒のこのような感覚を高めるために、実際に地域の行政機関等に社会課題の解決策を提案する課題解決型学習を実践し、生徒の内的有効性感覚が変容するプロセスを明らかにした。

はじめに

平成28年に選挙権年齢が18歳以上に引き下げられて以降、若者の政治参加を促すための教育の役割がより一層強く求められ、多くの研究や実践報告がなされている。

『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説公民編』においては、公民科の役割として「現実の社会的事象等を扱うことのできる公民科ならではの『主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成』が必要であり、子供たちに平和で民主的な国家及び社会の形成者としての自覚を涵養すること」(文部科学省 2019a)が必要とされている。

また、令和3年3月31日に文部科学省の主権者教育推進会議より出された「今後の主権者教育の推進に向けて(最終報告)」では、「新学習指導要領の下で、子供たちが主体的に、主権者として必要な資質・能力を身に付けていくことがこれまで以上に重要となっており、そのための指導の充実方策を講じることが喫緊の課題となっている」(文部科学省 2021)と示されている。

他方、令和元年11月に日本財団が発表した「18歳意識調査 第20回 -社会や国に対する意識調査-」(2件法 17歳~19歳の男女1,000人対象)(以下、「18歳意識調査」という)によれば、「自分で国や社会を変えられると思う」と答えた人の割合は我が国では18.3%で、9か国(インド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国、イギリス、アメリカ、ドイツ、日本)中最も低い割合となっている。

所属校においても、生徒の政治参加を促すことを意識した取組がなされているものの、令和4年度に第2学年の生徒を対象としてアンケート(2件法 64人回答)を行った結果、「自分で国や社会を変えられると思う」と答えた生徒の割合は25%にとどまった。

本県では、全県立学校で参議院議員通常選挙に合わせて「模擬投票」を行ってきた。しかしながら、高等学校

における、投票によらない多様な手段に関する政治参加教育については、実践事例の報告数が限られている。

国際比較調査団体 I S S P が平成26年に行った調査「Citizenship II」によれば、日本は諸外国に比べて、請願や陳情、デモ活動など、投票によらない多様な手段での政治参加経験が少ないことが明らかになっている。例えば、「署名活動」においては、経験者の割合が多いフランス及びスウェーデンに比べて30%以上少ない。加えて、「インターネットでの意見表明」もアメリカ・イギリス・スウェーデンに比べて10%以上少ない。

そこで本研究では、投票によらない多様な手段での政治参加に影響を与える「内的有効性感覚」という要因に焦点を当てる。地域社会の課題に対する解決策を考え、実際に提案する授業を通して、生徒の内的有効性感覚がどのようなプロセスで変化するかを検証する。

研究の目的

本研究では、地域の社会課題に対する解決策を考え、実際に提案するシチズンシップ教育(政治参加教育)が、どのようなプロセスで生徒の内的有効性感覚に影響を与えるかを検証する。検証に当たっては、本実践によって生徒の内的有効性感覚が高まったかを定量的に分析する。その後、生徒の内的有効性感覚に影響を及ぼす授業プロセスを明らかにする。

研究の内容

1 先行研究

(1) 内的有効性感覚

Balch(1974)は、市民自身が政治に対して影響を及ぼす力があるという信念を「内的有効性感覚」と定義した。金(2014)は、日本においては、内的有効性感覚が投票によらない多様な手段での政治参加に影響を与えていると述べている。

Balch(1974)及び18歳意識調査の質問項目「自分で国

1 県立舞岡高等学校 教諭

や社会を変えられるとと思うか」を踏まえ、本研究では内的有効性感覚が高い生徒を、「自分の行動で国や社会を変えられるとと思う生徒」と定義する。

(2) 政治参加教育の現状

山田(2016)は、政治参加経験が個人に与える影響として、参加の経験が習慣化する傾向や参加することによる教育効果があると述べている。一方で竹島(2016)は、明るい選挙推進協議会の調査結果から、これまでの政治・選挙教育は、定期試験や入学試験に対応するための知識注入型の無味乾燥な授業となっていたと指摘している。

2 内的有効性感覚を高める手立て

「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」では、「政治・経済」の目標として「社会の在り方についての見方・考え方を働きかせ、現代の諸課題を追究したり解決に向けて構想したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力」(文部科学省 2019b p.87)を育成することが示されている。さらに、令和5年6月に閣議決定された「教育振興基本計画」(文部科学省 2023)では、主体的に社会の形成に参画する態度の育成・規範意識の醸成が目標として掲げられている。また、基本施策として主権者教育の推進が示されており、地域課題に関する学習などについて、学校・家庭・地域の連携による取組の充実を促すこととされている。

山田、竹島の先行研究及び前述の資料より、生徒の内的有効性感覚を高めるためには、教室での知識獲得にとどまらず、実社会との関わりを実感できる経験をすることが重要であると考えた。そのため、地域社会の課題解決型学習に、実際に地域の行政機関等に社会課題の解決策を提案する活動を手立てとして取り入れることで、実社会との関わりを実感できる授業を実施した。

3 研究の仮説

本研究における仮説は次のとおりである。

地域の行政機関等に社会課題の解決策を提案する活動を取り入れた課題解決型学習を実施することで、生徒の内的有効性感覚を高めることができるだろう。

4 検証授業

(1) 概要

【期 間】令和5年9月5日(火)～10月13日(金)

【対 象】舞岡高等学校 第3学年 2クラス(79名)

【科 目】政治・経済

【教科書】高校政治・経済 新訂版(実教出版)

【单元名】地方自治、政治参加と世論～生きやすい世界
を自分たちで作るには?～

【時 数】10時間(50分授業)

【授業者】野澤 大地(筆者)

(2) 授業方法

検証授業では、次の活動を全10時間で行った(表1)。

表1 単元の構成、各時間の授業内容

次	時	小単元名 (時間数)	学習活動
①	1	地方自治の意義と役割 (1時間)	・単元を貫く問い合わせ理解し、学習前の自身の考えを記述する。 ・地方自治の意義について考える。
			・身近な人の課題発見・解決に関する経験談を基に、課題発見・解決に必要な要素を考える。
②	2	地域社会の課題の発見方法 (1時間)	・社会課題の発見・解決に関する模擬事例を読み、課題発見・解決に必要な資質・能力を身に付ける。
			・地域社会の課題を発見する。 ・グループで取り組む課題を何にするか検討する。 ・現時点で考えられる解決策を記述する。
③	3 4	地域社会の課題発見 (2時間)	・模擬事例の記述を見比べ、解決策のブラッシュアップに必要な視点を身に付ける。
			・自分たちが考えた解決策をブラッシュアップする。
④	5 6 7	地域社会の課題解決方法の検討 (3時間)	・提案先として考えられる相手をリストアップする。 ・提案先を絞り込む。 ・どのような方法で提案するかを検討する。
			・実際に提案する。
⑤	8 9	地域社会の課題提案先の検討、実際の提案 (2時間)	・どのような課題に取り組み、どのような解決策を、誰に、どのような方法で伝えるかを発表する。
			・単元を貫く問い合わせに答える。
⑥	10	地域社会の課題解決方法の発表 (1時間)	

また、生徒に対して、提案先に解決策を実際に伝えることを目標として示し、身の回りの課題のある場所を見たり、身の回りの人から情報収集したりすることを促した。これにより、課題発見及び解決が机上の議論にとどまらず、実社会に関わる形で進められることを目指した。

(3) 各場面の授業内容と学習活動

ア 第1時(地方自治の意義と役割)

第1時は、地方自治の意義と役割について基礎的な知識を獲得することを目的として行った。「本当に『国民全員が政治に参加すること』は良いことか?」を本時の問い合わせとして設定し、生徒は地方自治の意義を考察するとともに、民主政治において市民が政治に参加する意義を考えた。学習後の生徒の記述からは、「(地方自治への参加を通して)地域の公共サービスや政治の流れについて考えるきっかけとなり、一人ひとりが関心を持てるようになる」(括弧内は筆者加筆)というような、地方自治への参加が個人の意識に影響することに気付いた様子が見られた。

イ 第2時(地域社会の課題の発見方法)

第2時は、地域社会の課題を発見し解決する上で必要な考え方を身に付けることを目的とした。「社会の課題発見・課題解決のためには、どのような力が必要なのか?」を本時の問い合わせとして設定し、①身近な人へのインタビュー、②模擬事例を基にした、課題発見・解決に必要な

力の分析の二つの活動を行った。学習前の生徒の記述には、課題発見・解決に必要な能力として「行動力、権力」といった記述が見られた。一方で、学習後には「本質を見抜く力、新たな発想をする力」というような記述が見られ、思考の変化が見て取れた。

ウ 第3時、第4時(地域社会の課題発見)

第3時は、生徒が授業時間外に身の回りで発見した地域社会の課題をグループ内で共有し、グループで取り組む課題を一つに絞り込む活動を行った。この際、①解決までの見通しは立てられるか、②実現可能性のある解決策が見付かりそうかという二点を基準に絞り込み、グループで取り組む課題を決めた。

第4時は、本格的な情報収集の前に、現状で考えられる解決策を検討する活動を行った。

エ 第5時、第6時、第7時(地域社会の課題解決方法の検討)

第5時は、模擬事例を用いて、解決策のブラッシュアップに必要な視点を身に付ける活動を行った。地域社会の課題に対する、ブラッシュアップ前の解決策とブラッシュアップ後の解決策(模擬事例)を比較し、どうすればより良い解決策になるかをグループで考えた。

第6時、第7時は、第5時で身に付けた視点を活用して、自分たちが考えた解決策をブラッシュアップした。生徒は情報収集として、インターネットの活用以外にも、放課後に現地調査をしたり、関係先への問合せをしたりする活動も併せて行った。

オ 第8時、第9時(地域社会の課題提案先の検討)

第8時は、解決策の提案先を検討した。その際、①解決策について対応が可能な機関か、②生徒がコンタクトを取れるかという二つの視点で提案先の検討を行った。その結果、情報収集の際の問合せ相手を提案先とする以外にも、課題を担当する行政機関、企業等を提案先とするグループが見られた。

第9時は、提案先に実際に提案するための準備と、第10時にクラス内発表を行う際の準備を行った。外部への提案はメール及び問合せフォームを用いたものが9割を超えていたため、伝わりやすく丁寧な文章表現をグループ内で検討し、準備していた。また、個別課題としたクラス内発表に向けて、生徒は発表用シートの準備を行い、自身の学びを振り返った。

カ 第10時(地域社会の課題解決方法の発表)

第10時は、自分たちのグループが取り組んだ課題、その課題を選んだ理由、解決策、提案先、提案方法を発表した。全員が発表する機会を作るために、異なるグループの生徒3名が一つの発表グループに分かれ、グループ内で発表及びフィードバックを行う形式とした。

(4) 「単元を貫く問い合わせ」に対する解答の変容

検証授業では、「単元を貫く問い合わせ」として「半径5メートルの地域社会をよりよくするためにどうすればよいか」という問い合わせを設定した。生徒は第1時の冒頭と第

10時のまとめに自身の考え方を記述した(表2)。

表2 「半径5メートルの地域社会をよりよくするためにどうすればよいか」(単元を貫く問い合わせ)に対する生徒の考え方(趣旨の変わらない範囲で一部表現を改めている)

	第1時	第10時
生徒A	どうすれば良くなるかを考えて意見を集めめる。そこから変えていけば、皆が良いと思える意見を反映できる。	自分たちの身近な問題を見付け、どうするのかを考えて、実際に問題解決をしてくれる場所に提案をする(自分で行動をする)。他人事として考えるのではなく、まずは身の回りにもつと興味を持ってみる。そこから問題点を見付けたら、行動を起こすと自分が思っているより変えられる。
生徒B	視野を広げたり、見方を変えたりして積極的に働きかける。行動する際は人の賛同や協力を得る。	まずは地域の課題を、実際に足を運んだり話を聞いたりして身近なものにする。そこから課題を具体的かつ細かく分析し、解決の計画を立てる。今すぐには解決ができないでも、見通しを立てればゴールに向かうことができる。そして、自分たちだけで解決しようとせず、地域の方々や大人たちの協力を得る。使えるものは全部使って、解決策をより現実的なものにする。
生徒C	まず、地域について知り、自分が地域に対してどう思っているのか、何を求めているのかを明確にする。問題やより発展できる要素を見付ける。	自分の体験、周りの人の意見から課題を見付けて、目標を明確にして見据えながら、多くの人と案を共有する。その後に身近に協力してくれる人がいるのか、ほかに方法はあるのか、実現できるのかをキーワードとして案を練っていく。問題を考えるだけではなく、実際にやって、改善したい部分、気になったところを見付ける。解決策が出たら、周囲に協力してくれそうな人を見付け連絡する。というように、自分から動くということが、問題を解決する上でとても有効であるということが分かった。

第1時の記述では、課題発見から解決までの過程について具体的なイメージが持てず、断片的な記載にとどまるもののが多かったが、第10時の記述には、授業を通して課題発見、解決策の構想、課題解決の流れを理解した様子が多く見られた。また、生徒同士で協力すること、相手先に実際に提案すること、提案先の協力を得ることの重要性に気付く記述も見て取れた。

5 検証結果と考察

(1) 生徒の内的有効性感覚が高まったか(定量的分析)

仮説検証にあたり、事前アンケートと事後アンケートを実施した。「自分の行動で国や社会を変えられると思いますか」という質問を行い、4件法で回答を求め、授業前後での生徒の変容を分析した。事前アンケートは第1時の実施前、事後アンケートは第10時の実施後に実施した。事前・事後での回答の変化は図1のとおりである。

検証授業前は30.8%であった肯定的回答が、検証授業後には68.5%となり、実施前後で37.7ポイントの上昇が確認された。また、事前・事後で肯定的回答から否定的回答に変わった生徒が1名だったのに対し、否定的回答から肯定的回答に変わった生徒は28名だった。事前・事後ともに肯定的回答であった生徒は19名だった。

このことから、検証授業前後で生徒の内的有効性感覚が総体として高まったことが明らかとなった。

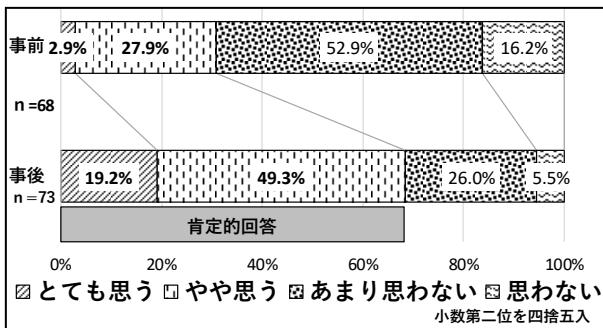


図1 アンケートの事前・事後回答結果

(2) どのような過程で生徒の内的有効性感覚が高まつたか(質的分析)

検証授業前後で内的有効性感覚が高い生徒が増えたことから、生徒の内的有効性感覚が高まる授業プロセスを明らかにするために、生徒へのインタビューによる質的分析を行った。

ア 質的分析に用いた手法

木下(2020 p. 37)は、分析方法の明確化と分析プロセスの明示化により、厳密な質的分析を可能にする手法として「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、「M-GTA」という)」を示している。M-GTAについて、木下(2020 p. v, p. 37)は、人と人との直接的関わり合いがある分野で用いられ、インタビューデータの分析方法が明確で、厳密な分析によってプロセスを描き出すことができる手法であると述べている。また、古野(2022)は、サンプリング数の少ないテーマを扱う際にも適すると考えられる手法であると述べている。このことから、分析手法としてM-GTAが適切であると判断した。

インタビューは、事前アンケートでは否定的であったものの、事後アンケートで肯定的な回答をした生徒28名のうち、4名を対象に実施した。この4名は、単元を貫く問い合わせに対する記述等で自身の考えを詳細に記述していた生徒のうち、検証授業を行った2クラスから2名ずつ、それぞれ異なるグループから選出した。

検証においては、文字起こししたインタビューデータを熟読し、「生徒の内的有効性感覚が高まるプロセス」に関する発話を抜き出し、解釈した上で定義し、そこから概念を生成した。これを繰り返しながら概念同士の比較分析を行い、その結果をサブカテゴリー、カテゴリーとして集約した。集約後、それぞれの関係を視覚的に示した結果図と、結果図を文章化したストーリーラインを作成した。さらに、上記の分析の厳密性を確保するため、指導担当者3名とともに分析過程の検討を行った。

M-GTAで分析を行った結果、九つの概念(概念1～9)を生成し、そこから(ア)【経験によるイメージ変化】、(イ)【「まだ高校生だから」自意識】、(ウ)【課題解決の実現可能性への気付き】の三つのカテゴリーを生成した。

以下、各カテゴリーについて生徒の発話例とともに説明した後、ストーリーラインを記述する。なお、〈〉は

概念、〔 〕はサブカテゴリー、【 】はカテゴリーを表す。

また、この分析は、インタビュー対象生徒4名の分析結果が、事前アンケートでは否定的であったものの、事後アンケートで肯定的な回答をした生徒28名全員に適用されるものではない。分析焦点者である「授業を通して内的有効性感覚が高まった生徒」が、内的有効性感覚を高めたプロセスを明らかにするものである。

イ 生徒へのインタビューから生成されたカテゴリー

(ア) 【経験によるイメージ変化】

生徒の内的有効性感覚を高めるための手立てを表すカテゴリーである。このカテゴリーは、概念1〈発見～提案の経験〉、概念2〈周りからの後押し〉、概念3〈実社会で使われる方法〉の三つの概念と、概念4〈明確な相手への発信〉、概念5〈明確な相手からの反応〉から成る一つのサブカテゴリー[提案先とのコミュニケーション]によって構成される。

概念1〈発見～提案の経験〉は、「『問題点を見付けてから、例文みたいにどうやればそれが改善に進むのかっていうのを考えてみてください』って言われたときに、こうすれば解決するなとか、これがダメだったらこれでもできるなっていう、自分の発想を広げられた」という発話などに見られた。

概念2〈周りからの後押し〉は、「班で一緒に考えるなかで、先生から『こうしてみたらいいんじゃない』であったり、『これなら出来そうだね』と言ってもらって、自分たちの考えも聞いてもらえるものなんじやないかと思いました」という発話などに表されていた。

概念3〈実社会で使われる方法〉について、生徒は「やっぱり自分たちの中だけでポンポン言うのと、実際にその外部の方に提案するのだと、ちゃんとしたと言わなきゃいけないというか、だからそういう意味では深く考えなきゃいけないなっていうのがあります」という思いを抱いていた。

サブカテゴリー[提案先とのコミュニケーション]は、概念4〈明確な相手への発信〉と、概念5〈明確な相手からの反応〉によって構成されている。概念4は、「連絡したら、連絡できるんだというように、連絡したらもっともっと実現が見えた」という発話などに見られた。概念5は、「返信が返ってきて、『御連絡ありがとうございます。私たちの事務所が管理しています』っていう風に、そういうコミュニケーションが取れたことで、なんか結構自分の声も届くんだけなっていう風に思った」という発話などに表されていた。

(イ) 【「まだ高校生だから」自意識】

生徒の内的有効性感覚が低い状態を表すカテゴリーである。このカテゴリーは、概念6〈アクセスのハードル〉、概念7〈知識不足〉、概念8〈考える「だけ」、調べる「だけ」学習〉によって構成される。生徒は、「課題解決に関わるのは大人で、高校生はまだ関わる存在ではない」という意識を持っていた。

(ウ) 【課題解決の実現可能性への気付き】

授業によって生徒の内的有効性感覚が高まった状態を表すカテゴリーである。このカテゴリーは、概念9〈あ、これ変えられる可能性あるんだな〉によって構成される。生徒は「先生から『土木事務所さんとか、そういうところに連絡すればいいんだよ』っていうことを聞き、連絡してみて、実際に返信が返ってきたときに、『あ、これ変えられる可能性あるんだな』っていう風に思いました」というように、経験を通して、高校生でも課題解決に関わることができる存在であるという気付きを得ていた。

ウ ストーリーライン(分析結果 概念番号は省略)

結果図をもとに記述したストーリーラインは、次のとおりである。

授業で行った手立てによって、【経験によるイメージ変化】が起こり、生徒の内的有効性感覚が高まった。この手立ては、課題発見、解決策の検討・改善、解決策の提案の一連の流れを経験し、イメージを身に付けることによる〈発見～提案の経験〉と、[提案先とのコミュニケーション]を伴う学習によって引き起こされる。この際、授業のために特別に用意されたやり方ではなく、問合せフォームやメール等の〈実社会で使われる方法〉が用いられることが重要である。また、これらの活動の中でクラス内での生徒間のやり取りや、教師からのフィードバックといった〈周りからの後押し〉を受けて、積極的に行動できるようになることが学習を促進する。

【まだ高校生だから】自意識を持つ、内的有効性感覚の低い生徒が、この手立てを通して【課題解決の実現可能性への気付き】を得て、内的有効性感覚を高める。

研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 定量的分析及び質的分析の結果

事前・事後アンケートの比較分析の結果、地域の行政機関等に社会課題の解決策を提案する活動を取り入れた課題解決型学習を実施することで、生徒の内的有効性感覚が高まることが明らかになった。また、M-GTAを通して、内的有効性感覚が高まる授業プロセスは、概念1〈発見～提案の経験〉、概念2〈周りからの後押し〉、概念3〈実社会で使われる方法〉、サブカテゴリー[提案先とのコミュニケーション]の四つ（以下、「生徒の内的有効性感覚が高まる4要因」という）が相互に関係し合って成立していることが明らかになった。

(2) 生徒の内的有効性感覚が高まる4要因と検証授業の対応関係

生徒の内的有効性感覚が高まる4要因が明らかになったことを受けて、検証授業における各時の内容との対応関係を考察した。その結果、概念1〈発見～提案の経験〉は第1時から第10時の学習活動全体で積み重ねられたと考えられる。さらに、概念2〈周りからの後押し〉は、

第3・4時のグループでの課題発見、第5・6・7時のグループでの解決策の検討・改善、第8・9・10時の提案先・提案方法の検討、提案活動、発表活動でのフィードバックといった、他者と協働する学習活動の中で受けていると考えられる。そして、概念3〈実社会で使われる方法〉、サブカテゴリー[提案先とのコミュニケーション]を、第8・9時に実施した提案活動で経験したことで、生徒の内的有効性感覚が高まると考えられる。

2 研究の課題と今後の展望

一方で、事後アンケートにおいて、「自分の行動で国や社会を変えられない」と答えた生徒が23名いた。このように考える理由として、①「自分一人だけで変える力はないから」と答えた生徒が6名、②「国や社会は規模が大きいから」と答えた生徒が5名いた。

アンケートの回答内容及び授業の取組状況から、①の背景としては、生徒の内的有効性感覚が高まる4要因のうち、特に概念2〈周りからの後押し〉が不足していたと考えられ、概念1〈発見～提案の経験〉の質が高まらず、肯定できるまでの自信に至らなかった可能性がある。②の背景としては、概念1〈発見～提案の経験〉において、地域レベルでの実感は湧いたものの、身の回りの地域と比べて広い社会や国という、より大きな範囲の実感には結びつかなかったことが推察される。

これらを踏まえ、生徒の内的有効性感覚が高まる4要因につながる活動の質を高め、より効果的に実践するためには、次の工夫が効果的であると考える。

(1) 中間発表等による解決策の見直し

検証授業では、第10時の発表活動まで自分たちの考えた提案内容を他のグループに伝える機会はなかった。しかし、中間発表等を行い、生徒同士で指摘し合う活動を取り入れることで、提案内容を見直すことができると考えられる。このように、概念2〈周りからの後押し〉を受ける機会を作ることで、概念1〈発見～提案の経験〉の質を向上させることができるであろう。

(2) 提案先からのフィードバック

今回は提案するまでを単元としており、提案に対するフィードバックを受ける機会と、フィードバックを踏まえてさらなる提案や行動を考える活動は、時間の都合上盛り込めなかつた。しかし、一部のグループでは、提案先からのフィードバックを受け取ったり、提案が実現したりする事例があった。例えば、公園の安全対策についての提案を、市の広聴制度を活用して行った結果、ウェブサイト上で公園の低木を補植する旨の回答を受けたケースがあった。また、街路樹の整備について、生徒による提案を受けて、土木事務所が実地調査を行い、街路樹の剪定につながったケースもあった。さらに、提案以前に提案先に連絡し、返答を受けていた生徒の発話から、概念5〈明確な相手からの反応〉が実社会とのつながりを実感するきっかけになったことも明らかになつた。

これらのことから、提案先からフィードバックを受ける機会と、フィードバックを踏まえてさらなる提案や行動を考える活動を計画に組み込むことで、学習活動がより充実すると考える。

(3) 総合的な探究の時間との関わり

「高等学校学習指導要領(平成30年度告示)」では、総合的な探究の時間における探究課題の例として「地域や学校の実態、生徒の特性等に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味・関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題などを踏まえて設定すること」(文部科学省2019b p. 475)として、地域社会の抱える課題について取り組むことも示されている。これを活用し、シチズンシップ教育(政治参加教育)を、総合的な探究の時間においても実践することで、教科等横断的かつ中長期的な取組としてより充実させられると考える。

さらに、コミュニティ・スクール等学校の有する教育資源を活用することで、より地域と連携・協働した学習機会を作ることも考えられる。

おわりに

本研究では、地域の社会課題に対する解決策を考え、実際に提案するシチズンシップ教育(政治参加教育)が、どのような過程で生徒の内的有効性感覚に影響を与えるかが分かった。

今後、様々な機会で本研究を活用した実践が行われ、生徒の内的有効性感覚が高まるプロセスに関する知見がさらに蓄積されることを期待する。

最後に、本研究を進めるにあたり、御協力いただいた舞岡高等学校の生徒・教職員をはじめとして、御指導いただいた全ての皆様に、深く感謝を申し上げる。

[指導担当者]

鈴木 健司² 高木 正樹² 加藤 充洋³

引用文献

日本財団 2019 「18歳意識調査『第20回 -社会や国に対する意識調査-』要約版」 p. 5
https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2019/11/wha_pro_eig_97.pdf (2023年11月22日取得)

文部科学省 2019a 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説公民編』 東山書房 p. 10

文部科学省 2019b 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)』 東京書籍

文部科学省 2021 「今後の主権者教育の推進に向けて

(最終報告)」 p. 2

https://www.mext.go.jp/content/20210331-mxt_kyoiku02-000013640_2.pdf (2023年11月22日取得)

文部科学省 2023 「教育振興基本計画」 pp. 53-54

https://www.mext.go.jp/content/20230615-mxt_soseisk02-100000597_01.pdf (2023年11月22日取得)

I S S P 2014 「Citizenship II」

https://search.gesis.org/research_data/ZA6670#variables|exploredata-ZA6670_VarV17|0|variable_order|asc (2023年6月9日取得 当該ページ「Variables (389)」欄を参照)

木下康仁 2020 『定本 M-G T A : 実践の理論化をめぐる質的研究方法論』 医学書院

金児希 2014 「政治意識の変容と発展 —政治的有効性感覚の比較研究—」 p. 136

https://uol.de/f/1/inst/sowi/oetken-brinkmann/Kim_Hakuron_seihon.pdf (2023年11月22日取得)

竹島博之 2016 「意識調査から見た有権者教育の射程と限界—若者の投票率向上のために—」 日本政治学会『年報政治学 第67巻 1号』 p. 23

山田真裕 2016 『政治参加と民主政治』 東京大学出版会 p. 114

George I. Balch 1974 「Multiple Indicators in Survey Research: The Concept "Sense of Political Efficacy」 pp. 1-43
<http://www.jstor.org/stable/25791375> (2023年11月22日取得)

参考文献

石橋章市朗 2010 「高校生の政治的有効性感覚に関する研究」

蒲島郁夫 1988 『政治参加』 東京大学出版会

久米郁男・川出良枝・古城佳子・田中愛治・真渕勝 2011 『政治学 補訂版』 有斐閣

柴田和範 2020 「主体的に政治に参加する態度を養う授業づくり—身近な地域を比較し考察する、高等学校公民科の授業—」

田中覚 2017 「政治参加意識を育むためのシチズンシップ教育—『私たちが拓く日本の未来』を活用した授業実践を通して—」

普川芳昭 2011 「高等学校におけるシチズンシップ教育の実践—身近な地域社会での課題解決に向けた取組を通じて—」

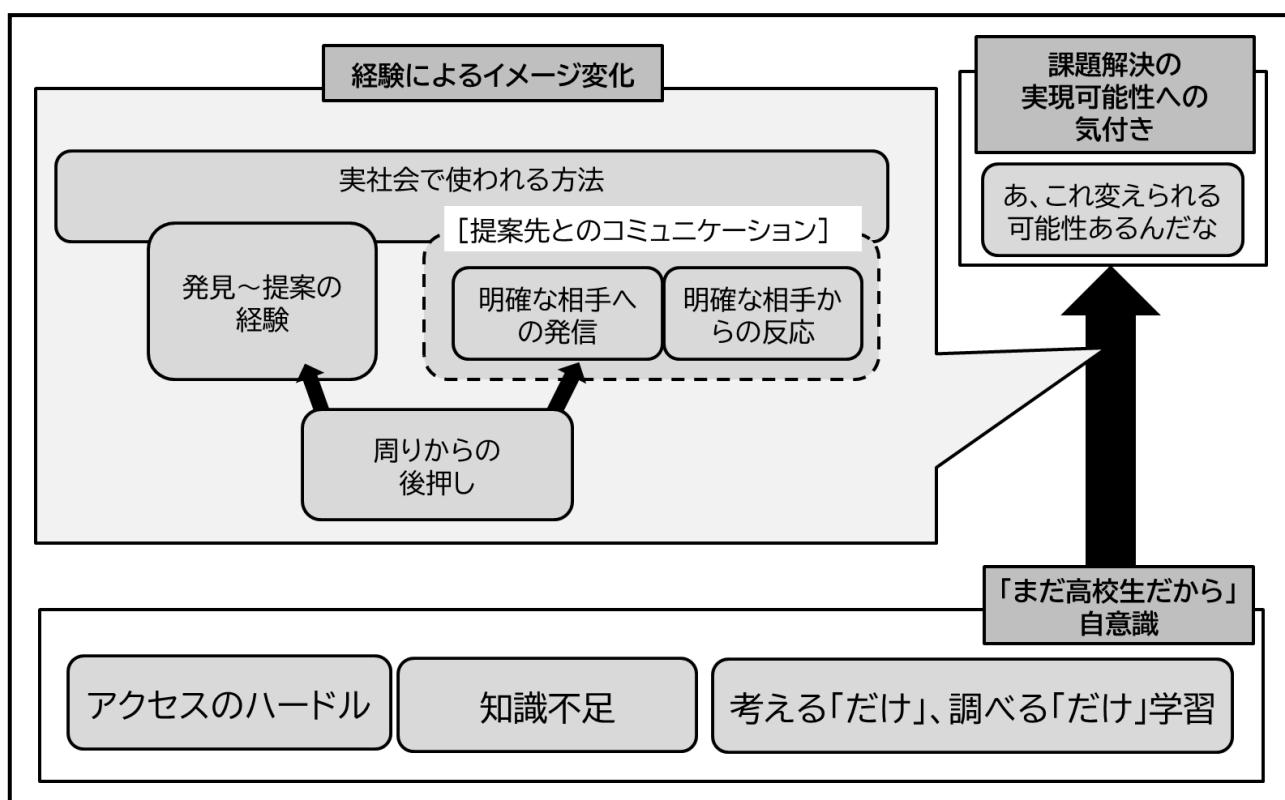
和田大志 2023 「高校生の『政治的有効性感覚』を高める主権者教育についての考察」

本研究の生徒の取組内容、M-G T Aの結果図及び詳細は、参考資料として、神奈川県立総合教育センターのウェブサイトに別途掲載しています。

(参考資料1)

参考資料1－表1 第3・4時の生徒の取組内容(P. 3 左側12行目の記載内容)

ゴミ・ポイ捨て対策	生活環境整備	道路・交通安全対策
中区のごみ収集について	戸塚区の公園整備について	通学路横断歩道への信号機設置について
由比ガ浜のゴミ対策について	戸塚駅周辺の路上喫煙対策について	舞岡高校前信号機の安全対策について
舞岡高校～舞岡駅のポイ捨て対策について	東山田公園の安全対策について	舞岡高校周辺の交通安全対策について
戸塚駅周辺のポイ捨て対策について	環状2号線沿いの街路樹について	港南区の交通安全対策について
	栄区のバス混雑対策について	戸塚駅周辺の違法駐輪対策について
	深谷通信隊跡地の利活用について	
	大岡川周辺の歩道整備について	
	舞岡高校の登下校時の服装について	
	舞岡高校敷地内の安全整備について	



参考資料1－図1 M-GTAの結果図(P. 4 左側40行目の記載内容)

(参考資料2)

参考資料2－表1 M-GTAの詳細(P. 4 ア 質的分析に用いた手法の記載内容)

分析テーマ	生徒の内的有効性感覚が高まるプロセス	
分析焦点者	授業を通して内的有効性感覚が高まった生徒	
生徒への質問項目	①なぜ検証授業前は、自分の行動で国や社会を変えられないと思っていたか。 ②授業内のどのような活動によって、自分の行動で国や社会を変えられると思うようになったのか。	
質問時間	1名あたり約15分	
逐語録の文字数	11,451文字	
概念名	定義(事例数)	具体例(抜粋 下線は筆者加筆)
【カテゴリーI : 経験によるイメージ変化】		
概念1 : 発見～提案の経験	課題発見、解決策の検討・改善、解決策の提案の一連の流れを経験し、イメージを身に付けること。(5)	こうやって連絡して相手がこうやって返してくれるので、(中略)もしいい案があれば <u>うまくやり取りして解決することもできるのかなっていうイメージがついた</u> っていう感じです。
概念2 : 周りからの後押し	クラス内での生徒間のやり取りや、教師からのフィードバックによって、積極的に行動できるようになること。(3)	<u>班で一緒に考える</u> なかで、 <u>先生から「こうしてみたらいいんじゃない」</u> であったり、「これなら出来そうだね」と言ってもらって、 <u>自分たちの考えも聞いてもらえる</u> ものなんじやないかと思いました。
概念3 : 実社会で使われる方法	授業のために特別に用意された手法ではなく、実社会のシステムに即して進めること。(8)	やっぱり自分たちの中だけでポンポン言うのと、 <u>実際にその外部の方に提案するのだと、ちゃんとしたこと言わなきゃいけない</u> 。
【サブカテゴリー：提案先とのコミュニケーション】		
概念4 : 明確な相手への発信	提案を実現可能な相手に実際に伝えすること。(5)	改善案を考えて終わりかなって思っていたところを、連絡する機会をいただけたんで、そこから <u>連絡したら、連絡できるんだ</u> というよう、連絡したらもっともっと実現が見えた。
概念5 : 明確な相手からの反応	提案を伝えた相手からの返答を受け取ること。(5)	自分たちの声が届かないっていう風に思っていたので、それに <u>返信が返ってきて</u> 、「ご連絡ありがとうございます。私たちの事務所が管理しています」っていう風に、そういう <u>コミュニケーションが取れた</u> ことで、なんか結構自分の声も届くんだなっていう風に思った。
【カテゴリーII : 「まだ高校生だから」自意識】		
概念6 : アクセスのハードル	連絡、接触が難しいと感じること。(5)	まさか <u>自分がその意見を言えると思ってなかった</u> というか、 <u>堅いイメージ</u> があった。
概念7 : 知識不足	課題解決に関する知識が欠けていること。(3)	問題点を解決しようって思ったときに変えてほしいなって思ったときに <u>どこに連絡していいかもわからない</u> し。
概念8 : 考える「だけ」、調べる「だけ」学習	実行せず、課題について考える、調べる学習にとどまる。(4)	考えることはあっても、例えば「SDGsから、その中で自分たちが気になることを見付けてください。そのことについて調べてください」っていうこともあったんですけど、 <u>実際にそれを実現しようっていう授業と活動とかっていうのが、体験してこなかったですね。</u>
【カテゴリーIII : 課題解決の実現可能性への気付き】		
概念9 : あ、これ変えられる可能性あるんだな (in-vivo 概念 ^{※1})	高校生でも課題解決に関われる存在だと考えること(4)	そういうところに連絡すればいいんだよっていうことを聞き、連絡してみて、実際に返信が返ってきたときに、「 <u>あ、これ変えられる可能性あるんだな</u> 」っていう風に思いました。

※1 in-vivo 概念：データの中にある特定の表現をそのまま取り出して概念とするもの(木下 2020 p. 148)。

第3学年 公民科（政治・経済）単元指導計画

長期研究員 野澤 大地

1 科目名 「政治・経済」（3学年）

2 単元名：地方自治、政治参加と世論～生きやすい世界を自分たちで作るには？～

3 単元の目標（ねらい）（身に付けさせたい力）

- ・我が国における地方自治に対する関心を高め、我が国における地方自治の意義と地方自治における自らの役割を意欲的に追究し、地方自治に関わる概念や理論などの理解を踏まえてよりよい社会の実現のために地域社会における課題を発見し主体的に解決しようとする。
- ・地域社会における課題を見出し、地方自治の概念や理論などと地域社会の課題における背景を手掛かりとして多面的・多角的に考察し、公正に判断して、その過程や結果を適切に表現する。
- ・地方自治に関わる概念や理論などと地域社会における課題に関する諸資料から、課題を解決する際に必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取りまとめる技能を身に付ける。
- ・我が国における地方自治に関わる概念や理論などと地域社会の課題について、現実社会の諸事象を通して理解を深める。

4 単元の評価規準

評価の観点		単元の評価規準
a	関心・意欲・態度	我が国における地方自治に対する関心を高め、我が国における地方自治の意義と地方自治における自らの役割を意欲的に追究し、地方自治に関わる概念や理論などの理解を踏まえて、よりよい社会の実現のために地域社会における課題を発見し主体的に解決しようとしている。
b	思考・判断・表現	地域社会における課題を見出し、地方自治の概念や理論などと地域社会の課題における背景を手掛かりとして多面的・多角的に考察し、地方自治の概念や理論などと地域社会の課題における背景を手掛かりとして公正に判断し、その過程や結果を適切に表現している。
c	資料活用の技能	地方自治に関わる理論や概念などと地域社会における課題に関する諸資料から、課題を解決する際に必要な情報を適切かつ効果的に収集し、読み取りまとめている。
d	知識・理解	我が国における地方自治に関わる概念や理論などと地域社会の課題について、現実社会の諸事象を通して理解を深めている。

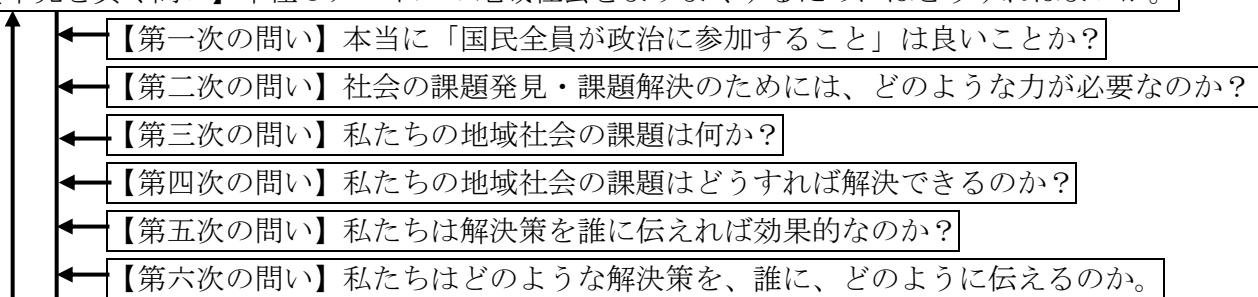
5 内容のまとめ

○：記録に残す評価 ●：指導に生かす評価

※取組内容が不十分なときは、第三次や第四次の内容に立ち戻ります。

6 単元における問い合わせの構造

【単元を貫く問い合わせ】半径5メートルの地域社会をよりよくするためにどうすればよいか。



7 指導と評価の展開例

○「記録に残す評価」

●「指導に生かす評価」

次	学習活動 ◇生徒の学習活動の概要	問主発問	評価の観点		評価のポイント・指導のポイント		
			関	思			
事前アンケート							
単元の導入	【単元を貫く問い合わせ】 半径5メートルの地域社会をよりよくするためにどうすればよいか。						
	◇単元の学習課題を確認し、単元を貫く問い合わせに対する仮説を立てる。【個人】	問 なぜ、「半径5メートル」なのか。			【指導のポイント】 単元の学習課題を確認し、課題の見通しを立てさせる。		
	問 どうなれば、「よりよくなつた」と言えるのか。						
	【第一次のねらい】 政治参加の意義を、キーワードを踏まえながら自分の言葉で説明できるようになる。						
	【第一次の指導における留意点】 理解にあたっては、生徒の素朴概念を表出させたのちに、政治参加の意義や地方自治の概念と結び付ける形で理解させる。また、政治参加の意義について多面的・多角的に考察し、表現させる。						
	【第一次の問い合わせ】 本当に「国民全員が政治に参加すること」は良いことか？						
	◇本時の問い合わせについて「あなたの予想」を考える。【個人】				【指導のポイント】 終了時の「授業後のあなたの答え」と比較できるようにする。		
	◇地方自治の意義を考える。 教科書（地方自治の概要）を読んで答える。	問 教科書 P.68 を見て、「なぜ地方自治を採用する必要があるのか」に答えましょう。【個人】			● 【評価のポイント】 地方自治に関する知識を身に付けている。（知 観察・記述）		
	◇日本の政治参加状況を知る。	問 （資料を示し、）「投票以外の政治参加経験がある人の割合」に関する資料から読み取れることとして正しいものはどれか。 【個人→ペア】			【指導のポイント】 資料から考察に必要となる情報を読み取らせる。		
	◇日・米・スウェーデンの政治への関心の状況を知り、政治に関心はあるが、投票以外の政治参加経験が少ない理由を考える。 ・「 」内に、「政治に関心はあるが、投票以外の政治参加経験が少ない」を記入する。	問 （資料を示し、）なぜ日本に住む人々は、アメリカ・スウェーデンと比較して、「政治に関心はあるが、投票以外の政治参加経験が少ない」のでしょうか？ 【個人→グループ】			【指導のポイント】 素朴概念とデータの矛盾に対して多面的・多角的に考察させる。 二つの資料から考察に必要となる情報を読み取らせる。		
第一次 1時間	◇地方自治への参加の意義を考察する。	問 （トックヴィル、ブライスの理論を提示し、）なぜ地方自治に参加することで、民主主義の質の向上・政治参加意識の向上につながると言われるのでしょうか？条件を踏まえて答える。【個人→グループ】			【指導のポイント】 地方自治への参加が民主主義にもたらす意義を考察させ、その結果を表現させる。		
	【第一次の問い合わせ】 本当に「国民全員が政治に参加すること」は良いことか？						
	◇本時の問い合わせに答える。【個人】				● 【評価のポイント】 地方自治及び政治参加の意義を理解している。（知 記述）		

※生徒の状況に応じて、グループワークをペアワークに、ペアワークをグループワークにする場合がある

第二次 1時間	<p>【第二次のねらい】 地域社会の課題を見つけ、解決するために必要な力（課題発見力、課題解決力）を身に付ける。</p>			
	<p>【第二次の指導における留意点】 身近な人へのインタビュー及び模擬事例を取り上げ、どのような視点や行動によって課題発見・解決をしているのかを考察させる。</p>			
	<p>【第二次の問い合わせ】 社会の課題発見・課題解決のためには、どのような力が必要なのか？</p>			
	<p>◇問い合わせに対する学習前の予想を記述する。【個人】</p> <p>問　社会の課題発見・課題解決のためには、どのような力が必要なのか？</p>			<p>【指導のポイント】 終了時の「授業後のあなたの答え」と比較できるようにさせる。</p>
	<p>◇3～4人のグループに分かれ、身近な人へのインタビュー（事前課題）を共有し、対話する。【（事前：個人→）グループ】</p> <p>問　困りごとを相談 or 解決している人と、そうでない人の違いは何でしょうか。</p>	●		<p>【評価のポイント】 事前課題の中から、問い合わせの解決に必要な情報を読み取っている。（技 観察・記述）</p>
	<p>◇模擬事例を基に、どのような力をどのように發揮して課題発見・解決をしているのかを考察する。【グループ】</p> <p>問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文章中（ X ）に入りそうな言葉は何でしょうか。（課題の本質を問う） ・今回の課題解決に必要だった要素は何でしょうか。 ・今回の課題が解決できたターニングポイント（転換点）はどこだと思いますか。なぜそう思いますか。 ・社会の課題発見・課題解決をしている人が持っている力とは、どんな力なのか？ 	●	<p>【評価のポイント】 地域社会の課題発見・解決方法を考察して記述している。（思 観察・記述）</p> <p>【指導のポイント】 対話を通じて、多面的・多角的に考察し、地域社会の課題発見のために必要な資質・能力について気付かせる。</p>	
	<p>【第二次の問い合わせ】 社会の課題発見・課題解決のためには、どんな力が必要なのか？</p>			
	<p>◇本時の問い合わせに答える。【個人】</p> <p>◇次回の問い合わせを聞き、身近な地域の課題を見つけてくる。</p>	●	●	<p>【評価のポイント】 地域社会の課題発見・解決方法を考察して記述している。（思 記述）</p> <p>資料の中から、課題の解決に必要な情報を読み取っている。（技 記述）</p>

第三次 2時間	【第三次のねらい】自分たちの地域社会の課題を見つけ、実現可能性と有効性を踏まえた解決策の案を記述して表現する。				
	【第三次の指導における留意点】グループ内の対話による合意形成が図れるように留意する。				
	【第三次の問い合わせ】私たちの地域社会の課題は何か。				
	◇課題提出までの見通しを持つ。【個人】				
	◇3～4人のグループに分かれ、各自が考えてきた自分の地域社会の課題を共有する。【(事前：個人→) グループ】	●			【評価のポイント】 自らの地域の課題を発見している。(恩 観察・記述)
	◇自分たちのグループがどの課題に取り組みたいかを検討する。【グループ】		●		【評価のポイント】 実現可能性と社会的意義を踏まえて、取り組む課題を検討している。(恩 観察・記述)
	◇自分たちのグループが取り組む課題の解決策を考察し、表現する。【グループ】 (早く終わったグループは第四次に進む)		●	●	【評価のポイント】 実現可能性と社会的意義を踏まえて解決策を考察し、表現している。(恩 観察・記述) 資料の中から解決策を表現するために必要な情報を収集している。(技 観察・記述)

第四次 3時間	<p>【第四次のねらい】解決策を改善する活動を通して、現在実施されている対策の視点、実現可能性の視点、有効性の視点などの様々な視点で解決策を考える。</p> <p>【第四次の指導における留意点】練磨の活動に当たっては、練磨によってどのような資質・能力を身に付けることが望まれるかを、実践を通して理解させる。</p> <p>【第四次の問い合わせ】 私たちの地域社会の課題はどうすれば解決できるのか。</p>				
	<p>◇地域の課題解決に関する練磨前・練磨後の2つの文章を比較し、練磨の概念を理解する。【グループ】</p> <p>問 2つの文章は、どの点がどのように変わったか。</p>				<p>【指導のポイント】 模擬事例を通して、練磨の概念を理解させる。</p>
	<p>◇前回考えた解決策とは異なる解決策を新たに二つ考える。 【グループ】</p> <p>——以降、3時間繰り返す——</p> <p>◇前時までと同じグループに分かれ、前回までに書いた解説文を練磨し改善する。【グループ】</p>	●	●		<p>【評価のポイント】 多面的・多角的な視点で考察をしている。(恩 観察・記述)</p>
	<p>◇練磨によって改善した解説文について、疑問点や不明点、書かれていない点や更なる改善点を記述する。【個人】</p> <p>(早く終わったグループは第五次に進む)</p> <p>(戻る必要があるグループは第三次に戻る)</p>	●			<p>【評価のポイント】 多面的・多角的な視点で考察をしている。(恩 観察・記述)</p> <p>多面的・多角的な視点での考察に必要な情報を読み取っている。(技 観察・記述)</p>
					<p>【評価のポイント】 多面的・多角的な視点で振り返り、その結果を表現している。(恩 観察・記述)</p>

第五次 2時間	【第五次のねらい】 考えた解決策の、実現可能かつ効果的な提案先を考える。			
	【第五次の指導における留意点】自分たちの提案を実現させるためには、誰にどのような形で伝えるかが重要かを検討させる。			
	【第五次の問い合わせ】 私たちは解決策を誰に伝えれば効果的なのか？			
	◇提案先の案を付箋に記入する。【個人】	●		【評価のポイント】 課題解決に必要な人的資源を主体的に発見しようとしている。(関観察・記述) 【指導のポイント】 質にこだわらせず、より多くの案を出すことを優先させる。
	◇付箋に記入した提案先の案を、模造紙を使って共有し、実現可能性と社会的意義（有効性）の観点から検討する。【グループ】	●	●	【評価のポイント】 提案先を実現可能性と社会的意義（有効性）の観点を軸に多面的・多角的に考察し判断している。(恩観察・記述)
◇どのように解決策を伝えるか方法を検討する。【グループ】		●	●	【評価のポイント】 提案先の決定に必要な情報を読み取っている。(技観察・記述) 地方自治における、直接民主制の仕組み及び住民が直接影響力を行使できる手立てを、活用可能な形で理解している。(知観察・記述) 【指導のポイント】 自分たちの提案内容が最も効果的に伝わる手法を選択させる。
◇実際に次の方法などを用いて、解決策を提案先に送る。 ・市民からの声（広聴制度） ・陳情 ・請願 ・投書 ・訪問		●		【評価のポイント】 自己調整しながら計画を進めている(関観察) 【指導のポイント】 自分たちの提案内容が最も効果的に伝わる手法を実践させる。
※グループによって提案先及び提案手法が異なる。 ※訪問を実施するグループは、別途行う。				
(早く終わったグループは第六次の準備を行う)				
(戻る必要があるグループは第三・四次に戻る)				

第六次 1時間	【第六次のねらい】自分たちの考えた解決策の提案先・提案内容をまとめ、伝える。			
	【第六次の問い合わせ】 私たちはどのような解決策を、誰にどのように伝えるのか。			
	◇提案内容・提案先を報告する。 【グループ】 ○次の内容について報告する。 ・課題として取り上げた地域（戸塚区など） ・取り組んだ課題 ・その課題を選んだ理由 ・課題解決による受益者 ・解決策の内容 ・提案先 ・提案方法（提案日を含む） ※本時までに提案を終えたグループはその結果を報告する。提案が終わっていないグループは予定を発表する。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
【単元を貫く問い合わせ】 半径5メートルの地域社会をよりよくするためにはどうすればよいか。				◇振り返りをする。【個人】
<input type="radio"/>				【評価のポイント】 課題解決に向けて粘り強く取り組んでいる。（関 記述）

事後アンケート

全体の流れの確認

目標

自分から前向きに身近な地域の問題解決に向かい、「なぜその問題があるのか」を考え、良い解決策を考える力・伝える力を身に付ける。

授業の流れ

土	日	月	火	水	木	金
9/2	3	4	5	6	7	8
			授業①			授業②
			3-1①	3-3①		3-1・3②
9	10	11	12	13	14	15
授業③・④ 地域の問題を見つける、グループで取り組む内容を決める。						
			3-1③	3-3③		3-1・3④
16	17	18	19	20	21	22
地域の問題を見つける、 グループで取り組む内容を決める。			授業⑤・⑥・⑦ 解決策を考える。改善する。			
			3-1⑤	3-3⑤		3-1・3⑥
23	24	25	26	27	28	29
授業⑤・⑥・⑦ 解決策を考える。改善する。						
			3-1⑦	文化祭準備	文化祭準備	文化祭
30	10/1	2	3	4	5	6
授業⑤・⑥・⑦ 解決策を考える。改善する。						
文化祭	文化祭片付け	文化祭代休	文化祭代休	3-3⑦		3-1・3⑧
7	8	9	10	11	12	13
授業⑧・⑨ 解決策を誰に、どのように伝えるかを決める。						
			3-1⑨	3-3⑨		発表会 3-1・3⑩

※進み具合に応じて、予定より早く進んだり、戻ったりして構わない。

単元全体の問い合わせ

「半径5メートルの地域社会をよりよくするためににはどうすればよいか。」

あなたの予想

第1回 地方自治の意義と役割

教科書 P.68~70、73、83

《この時間のねらい》

政治参加の意義を、キーワードを踏まえながら自分の言葉で説明できるようにする。

キーワード：地方自治・政治参加・民主主義

選挙前になると、「選挙に行きましょう」と呼びかけられます。

一方で、政治に詳しい人だけが責任を持って政治を行う方が良いという考えもあります。

なぜ全員が政治に参加する制度にしているのでしょうか。

本当に「国民全員が政治に参加すること」は良いことでしょうか？

本時の問い合わせ：本当に「国民全員が政治に参加すること」は良いことか？

あなたの予想【良いこと・良くないこと】

理由

授業後のあなたの答え【良いこと・良くないこと】

理由

教科書には「地方自治」とあるけど、なんでこんなことする必要があるの？

国（中央）には国会とか内閣があるんだから、そこで決めればよくなっていますか??

Q1：教科書P68を見て、「なぜ地方自治を採用する必要があるのか」に答えましょう。

「地方自治」と「民主政治」ってどう関係あるんですか？そもそも自分たちに関係ありますか？

別紙の二つの資料を見て、問い合わせに答えましょう。

Q2：資料1「投票以外の政治参加経験がある人の割合」から読み取れることとして、正しい選択肢を右上の1～3からすべて選びましょう。

- | | |
|---|--|
| 1 | 日本・アメリカ・スウェーデンの「寄付・基金の創設」経験のある人数を比べると、多い順にスウェーデン<アメリカ<日本である。 |
| 2 | 日本に「投票以外の政治参加経験がある人の割合」が少ないのは、政治に関心がないためである。 |
| 3 | 日本は、アメリカ・ヨーロッパの国と比較してすべての項目で割合が低い。 |

Q3:なぜ日本に住む人々は、アメリカ・スウェーデンと比較して、
「」のでしょうか？

資料1・資料2と自分たちの経験・考えを踏まえて考えましょう。

[Large empty box for writing]

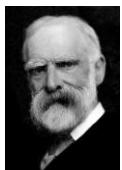
結局「地方自治」がどう「政治参加」・「民主主義」に繋がるんですか??



民主主義という制度は、多数者が数の力で少数者の権利を侵す可能性がある。

住民が、身近な地域の政治への参加(地方自治)を通して政治を経験し、主権者としての精神や能力を磨くことが重要だ。

トックヴィル(仏・1805~1859)



地方自治は民主主義の学校である。

住民が、身近な地域の政治への参加(地方自治)に参加することで、社交性や常識も身に付く。

ブライス(英・1838~1922)

Q4:なぜ地方自治に参加することで、民主主義の質の向上・政治参加意識の向上に繋がると言われるのでしょうか？次の条件を踏まえて答えましょう。

【条件】

- ・地方自治のどのような活動に参加する想定かを具体的に書く。
(請願・陳情・直接請求・防災訓練への参加 など)
- ・その活動に参加すると、どのようなことができるようになるのか具体的に書く。

[Large empty box for writing]

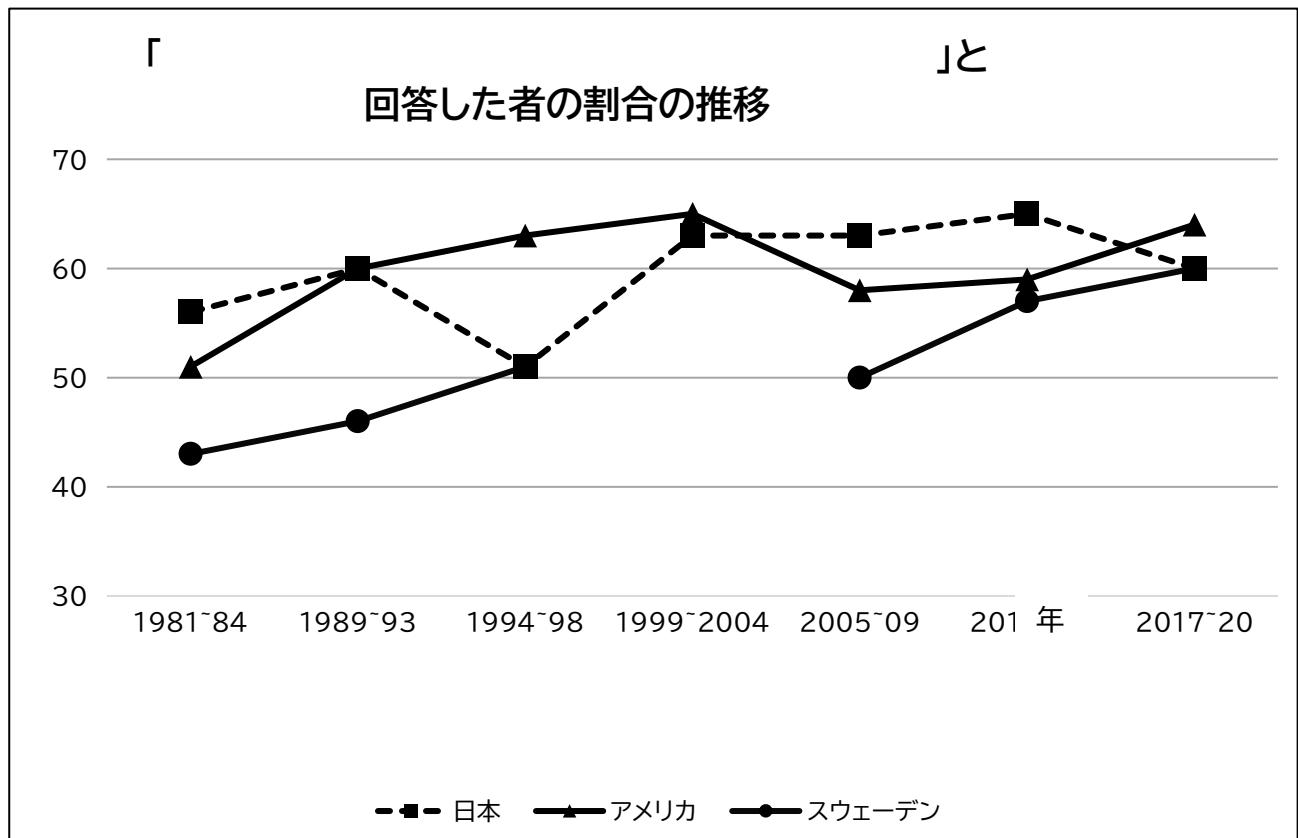
資料1

投票以外の政治参加経験がある人の割合 (%)

	日本 JP	韓国 KR	アメリカ US	イギリス GB	ドイツ DE	フランス FR	スウェーデン SE
署名活動	42.6	40.2	66.8	70.4	62.6	73.8	73.8
商品のボイコット	18.8	26.4	37.9	38.9	51.8	38.7	66.6
デモへの参加	7.1	13.9	21.8	17.8	33.4	47.4	28.5
政治集会への参加	10.8	9.1	29.6	17	33.2	34	29.8
政治家への連絡	4.6	7.6	37	30	23.3	18.7	23.6
寄付・基金の創設	25.6	27.9	44.5	30.5	65.9	44	50.1
メディアへの連絡	3	4.7	11.3	12.4	18.5	9.5	14.5
インターネットでの意見表明	1.9	5.5	22.1	12.9	11.8	11.6	16.3

ISSP Citizenship II を基に作成

資料2



第2回 地域社会の課題の発見方法

教科書 P. 73、83

《この時間のねらい》

地域社会の課題を見つけ、解決するために必要な力(課題発見力・課題解決力)を身に付ける

キーワード:課題発見・課題解決・政治参加

前回、地方自治への参加が民主主義に繋がることを見できました。
今回は皆さんが地方自治に参加するための準備をします。

社会の課題発見・課題解決をしている人は、身近にいますか？遠い存在でしょうか？
いま想像した人は、どんなイメージの人でしょうか。権力や立場、お金がある人ですか？

ですが、全員がそのように人になることはないでしょう。
そもそもどんな力があれば、課題を見つけたり解決したりできるでしょうか。

本時の問い合わせ:社会の課題発見・課題解決のためには、どのような力が必要なのか？

あなたの予想

なぜそう思うのか

授業後のあなたの答え

なぜそう思うのか

Q0:身の周りの年上の人に、「自分の身の回りに解決すると社会が良くなる課題はあるか？」・「その課題を相談したり、解決したりしようとしているか？」・「そう答えた理由」を聞いてみましょう。【事前課題】

課題はあるか？	ある(内容: ない)
その課題を相談したり、 解決したりしようとして いるか？	している (誰に or どのように: していない)
そう答えた理由	

→3~4人のグループで内容を共有しましょう。

Q1:課題を相談 or 解決している人と、そうでない人の違いは何でしょうか？

Q2:別紙の資料を見て、問題に答えましょう。

(1) 文章中 **X** に入りそうな言葉は何でしょうか？

(2) 今回の課題解決に必要だった要素は何でしょうか？ 考えられる限りあげましょう。

(3) 今回の課題が解決できたターニングポイント(転換点)はどこだと思いますか？

なぜそう思いますか？

ターニングポイント:	-----
理由	-----

(4) 社会の課題発見・課題解決のためには、どんな力が必要なのか？

⇒解答は「授業後のあなたの答え」へ

通学路についてのエピソード

保護者 A: うちの子の通学路が危ないんです。結構車の通りが多い道路で、結構抜け道にもなっていて車多くって、少しくねくねして、しかも坂だから。なのにその脇が通学路になっていて危ないんです。だからガードレールを作つて、子どもたちの通学路を安全にしてもらいたいんです。

市議会議員 B: 区役所に言ってみたんですが、予算がつくかつかないかの問題ではなくて、物理的につけられるかどうかの問題があるんです。物理的にっていうのは、道の幅がそれだけ十分にないとガードレールを設置すると、今度は車道が狭くなっちゃうから、かえつて危ないって話なんです。ガードレールを設置するにも基準がありますから、物理的に設置ができないんです。

保護者 A: そんなこと言っててこのままじゃ危ないじゃないですか。何の解決にもなつてないです…

市議会議員 B: ガードレールはつけられませんが、課題の本質はガードレールがつくかつかないかじゃなくて、
X どうかではないでしょうか？そこを通らなきゃいいじゃないでしょうか。

地元住民 C: 道はありますよ。ただちゃんとした道じゃなくてね。地図上は道になつてるんだけども、長い間誰も使っていないもんだから雑草や木が生えてしまつていて。それで通れないんですよ。

保護者 A: それでも、そこが道なら草木を手入れすればいいんじゃないですか。

区役所職員 D: その道路の草木は市が刈り取れます。

市議会議員 B: 道を確保できたらそつちに通学路を移せそうですね。そうすればガードレールをつけなくても大丈夫だ。あとは学校の許可が出れば大丈夫ですね。

B 議員による後日談

無事に草木の手入れがされ、道が通れるようになったので、学校からの許可も下りて通学路を変えることができました。最初に頼まれたガードレールの設置については、全くお手上げだったんです。

だけど話している中で本当の課題が分かるじゃないですか。本当の課題はガードレールをつけたいってことじゃなくて、X どうかだと。だったら何かガードレールでない別の形がないかっていうことを、議論したわけです。

最初に頼まれることができなかつたから申し訳ない部分もありました。でもそれでごめんなさいで終わるのではなくて、別の形で本当の課題に、課題の改善につながる方法がないかを正直に相談しました。いつもそういう別の解決策があるわけじゃないです。たまたま今回はそういうのがあって、だったらやってみましょうとなりました。区役所もそういうことを受けて、ちゃんと動いてもらうと。

それで今回は最終的に子どもたちの通学路・登下校の安全性っていうのも高まりました。



第3・4回 地域社会の課題発見

教科書 P.73・83

《この時間のねらい》

自分たちの地域社会の課題を見つけ、解決策を考える。 キーワード：課題発見力

自分たちの地域社会には、どんな課題があるでしょうか？

実際に歩いたり、身近な人に聞いたり、詳しい人に聞いたり、区民センター・区役所に行くなど、直接見聞きするといい発見があります。

本時の問い合わせ：私たちの地域社会の課題は何か？

Q0：私の地域社会の課題を見つけましょう。【事前課題】

Q0-1：どこの場所の課題に取り組みますか？

Q0-2：課題は何ですか？

Q0-3：その場所・その課題にした理由は何ですか？

Q0-4：その課題を解決すると、誰にとってよりよくなりますか？

Q0-5：現状考えられる解決策は何ですか？

A0-1場所

A0-2課題

A0-3その場所・その課題にした理由

A0-4対象者

A0-5現状考えられる解決策

→グループで共有しましょう。

課題を持ち寄りましたけど、グループで取り組む課題はどうやって決めればいいんですか？

最初から多数決にするのはやめましょう。

お互いどんな思いでその課題を選んだのかを分かり合い、解決までの見通しは立てられる
かなどを踏まえて、全員が納得できる課題を選びましょう。

二つ以上を合わせてみたり、全員が納得できる新たな選択肢を作ることもあり得ます。

Q1:グループで取り組む地域社会の課題を見つけましょう。

Q1-1:メンバーは誰ですか？

Q1-2:どこの場所の課題に取り組みますか？

Q1-3:課題は何ですか？

Q1-4:他の場所・課題ではなく、その場所・その課題にした理由は何ですか？

Q1-5:その課題を解決すると、誰にとってよりよくなりますか？

Q1-6:現状考えられる解決策は何ですか？

組番 氏名
A1-1 メンバー
A1-2 場所
A1-3 課題
A1-4 その場所・その課題にした理由
A1-5 対象者
A1-6 現状考えられる解決策

《この時間のねらい》

解決策を改善(練磨)する活動を通して、様々な視点で解決策を考える。

キーワード:課題解決力・練磨

今考えている解決策は、これ以上良くならない最高のものですか？

解決策のアイデアをより良いものにするためには、いろんな視点からの意見が必要です。

実際にやってみましょう。

本時の問い合わせ:私たちの地域社会の課題はどうすれば解決できるのか。

Q1:改善前と改善後では、どのような点が改善されましたか？

例1

改善前	駅周辺の喫煙の規制をしてほしいです。歩きたばこをしている人が多く印象が悪いです。近くに保育園があるので、悪影響にならないかも心配です。
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・歩きたばこによって、受動喫煙があるから危ない。(受動喫煙の危険性) ・街を歩いて確かめたら、特に自動販売機の近くに捨てられていた。 (自動販売機近くの吸い殻のポイ捨て) ・規制すると、隠れて吸う人が増えるから規制は難しいのではないか？ ・規制できないとしても、一か所で吸ってくれればまだいいのではないか。 (規制が難しい場合の喫煙所の設置の要請)
改善後	駅周辺の喫煙の規制をしてほしいです。駅周辺には保育園があり、子どもたちに健康被害などの悪影響が出ないか心配です。一般の非喫煙者にも健康被害があると思います。また、吸い殻が自動販売機の近くに捨てられていて、印象が悪いです。 規制が不可能なら、せめてしっかりとした喫煙所を設けてほしいです。

例 2

改善前	子どもの数に対して子供の遊び場の数が少ないことが分かりました。子どもが遊べる公園の数を増やしてもらいたいです。新しく公園を作ることを提案します。
意見	<ul style="list-style-type: none"> ・市役所の人に聞いて予算を調べたら、新しく公園を作るお金はなさそうだった。 (財政面での実現可能性の指摘) ・新型コロナウイルス感染症の影響で、子どもが遊べるイベントがなかった。 (子どもが遊ぶ機会に関する意見)
改善後	子どもが楽しく遊べる機会を増やすために、子ども向けのイベントを小学校の敷地を使って開いてほしいです。身近にすでにある施設を使うことで予算も抑えられると思います。地域の中学生・高校生や大人のボランティアが運営を行い、地域の子どもが参加することで、新型コロナウイルス感染症の影響で少なくなった人々のつながりも取り戻せると思います。

改善前は、
改善後は、

改善前は、
改善後は、

Q2: No.3 のプリントで考えた解決策とは別の解決策をあと二つ作ってみましょう。

解決策②

解決策③

結局、自分たちの解決策ってどうやって改善すればいいんですか？

Q1・Q2でやったことの、どんなことが参考に使えそうでしょうか？

三つの解決策を比べる・実現可能性・現状はどうなっているか・実際に取られている解決策はあるか・そもそも何が問題なのかなどが考えられるといいですね。

「なぜ？」を5回繰り返すと本当の課題が見えてくるとも言われます。

グループ内で試してみてもいいですね。

Q3:自分たちの解決策は、どのように改善できますか？

改善メモ

改善後

第8・9回 地域社会の課題提案先の検討

教科書 P.73・83

《この時間のねらい》

考えた解決策の、実現可能かつ効果的な提案先を考える。

キーワード:課題解決力・実現可能性・社会的意義(有効性)・住民自治

その解決策を解決するには、どんな制度を使い、どんな方法で、どんな人に伝えればいいのでしょうか?

この選択は重要です。選択次第ではより良い形で実行できますが、流されて終わってしまう可能性もあります。

本時の問い合わせ: 私たちは解決策を誰に、どのように伝えれば効果的なのか?

Q1:この解決策を実行できる可能性があるのは誰(何をしている人)ですか?

Q1-1:個人でふせんにひたすら書き出していきましょう。(記入例)

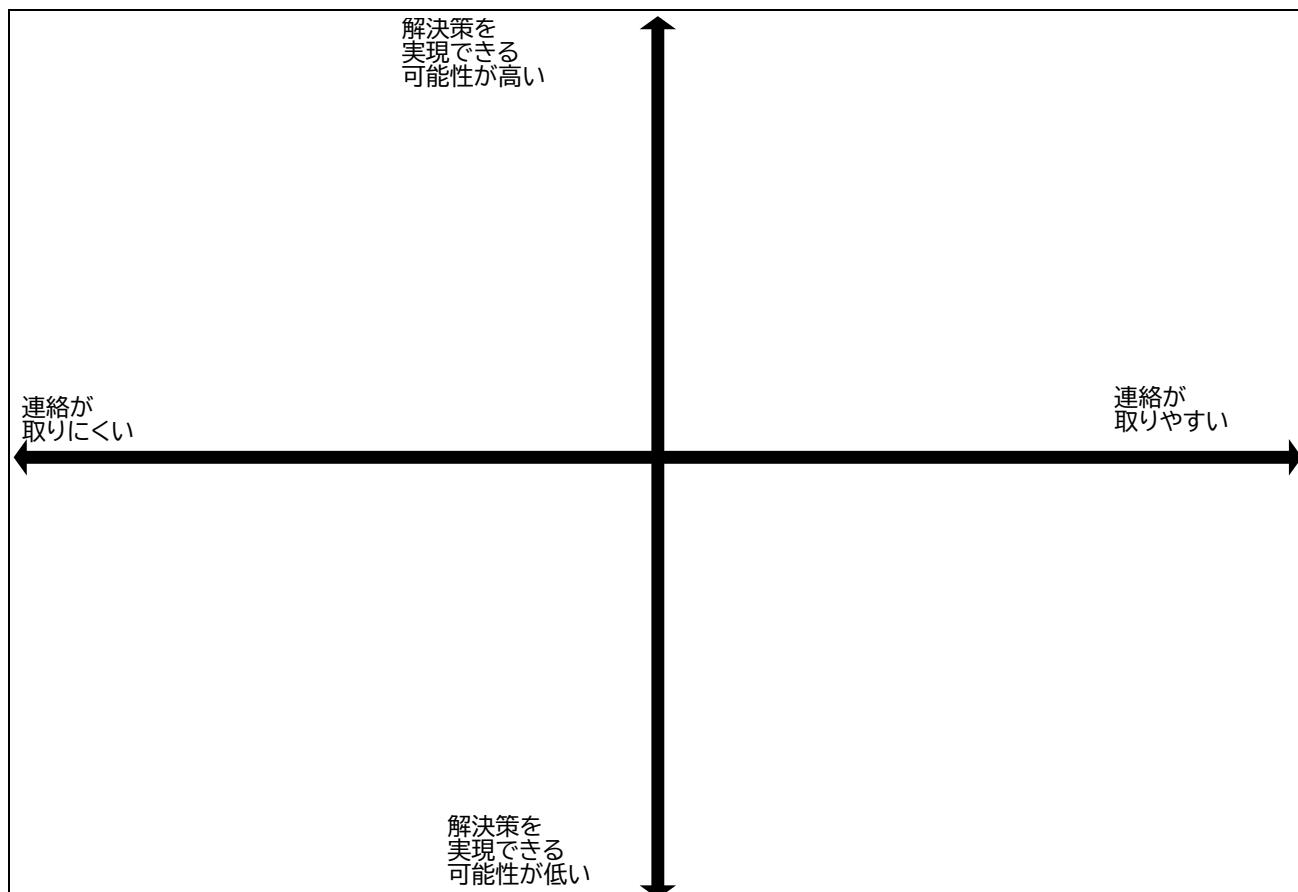
実際に困っている人	昔困っていた人	区役所	ボランティア
議員	保育園	学校	

Q1-2:グループで共有しましょう。同じ人はまとめましょう。(記録用)

どうやって提案先を絞り込めばいいんですか？

「解決策を実現できるか」「そもそもその人に連絡が取れるか」の二点で分類してみましょう

Q1-3:グループで共有し、出てきた人たちを実現可能性で分類しましょう。



⇒実現可能性が高く、連絡が取りやすいのは【 左上 ・ 右上 ・ 左下 ・ 右下 】

Q2:私たちは解決策を誰に、どのように伝えれば効果的でしょうか？

相手
選んだ理由

【参考】伝えるための方法

○直接会う

○電話

⇒①アポイントを取る。

・授業の取組であることを伝える。

・提案をしたいと伝える。

・行う日時を調整する。(自分たちが行ける日を2~3日候補として出しておく。)

②伝える内容をあらかじめまとめておく。

○手紙(陳情・請願など)

○電子メール

○問い合わせフォーム(例:広聴制度、市民からの提案など)

⇒①伝える内容を明確・シンプルにして伝える。

○新聞発表

○地域の回覧板・掲示板

⇒①担当者に連絡を取る。

②伝える内容をあらかじめまとめておく。

③どの媒体に、いつ、どのような内容で掲載して欲しいか明らかにしておく。

○その他

【実際に伝える前に確認すること】

□提案するために何を準備しなければならないかが、計画できているか。

□提案までのスケジュールを立てているか。

□誰が、何をやるかの役割分担は出来ているか。

□提案する先への事前連絡は済んでいるか。

□伝える内容は分かりやすく、簡潔に、明らかになっているか。

【次回までの課題】グループで取り組む地域社会の課題の解決策をまとめましょう。

Q3-1:メンバーは誰ですか？

Q3-2:どこの場所の課題に取り組みますか？

Q3-3:課題は何ですか？

Q3-4:他の場所・課題ではなく、その場所・その課題にした理由は何ですか？

Q3-5:その課題を解決すると、

誰があなたたちに「ありがとう」と言ってくれそうですか？

Q3-6:解決策は何ですか？

Q3-7:この解決策を誰に伝えますか。

Q3-8:どのような方法で伝えますか。

解決策発表シート

組番 氏名
A3-1 メンバー
A3-2 場所
A3-3 課題
A3-4 その場所・その課題にした理由
A3-5 対象者
A3-6 解決策
A3-7 提案先
A3-8 提案方法

第10回 地域社会の課題解決方法の発表

教科書 P.73・83

《この時間のねらい》

自分たちの考えた解決策の提案先・提案内容を言葉にする。

キーワード:課題発見力・課題解決力・地方自治・政治参加・民主主義・住民自治

本時の問い合わせ:私たちはどのような解決策を、誰に、どのように伝えるのか。

グループで取り組む地域社会の課題の解決策を発表しましょう。

- メンバーは誰ですか？
- どこの場所の課題に取り組みますか？
- 課題は何ですか？
- 他の場所・課題ではなく、その場所・その課題にした理由は何ですか？
- その課題を解決すると、誰にとってよりよくなりますか？
- 解決策は何ですか？
- この解決策を誰に伝えますか。
- どのような方法で伝えますか。

Q1:半径5メートルの地域社会をよりよくするためににはどうすればよいか。
